

キャラクター名  
北条 劍丞

プレイヤー名

シンドローム	バロール ブラム=ストーカー		ワークス	マフィア	カヴァー	UGNエージェント
	オプション		年齢	28	性別	男
覚醒	渴望	衝動	自傷	初期侵食率	33	%
出自	義理の両親	経験	大恋愛	邂逅	慕情	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	25
肉体	1	0	0			1	行動値	17
感覚	3	1	3			7	(非装備時)	17
精神	3	0	0			3	戦闘移動	22
社会	1	0	0	1		2	全力移動	44

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃	3		RC			交渉	1	
回避			知覚			意志			調達	3	
運転:	2		芸術:			知識:			情報:裏社会	5	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
斥力の矢	射撃	7r+2		+LV*2		
壁に耳あり筒子に目ありリベレーション	射撃	13r+3		+4	1,3,4,5。装甲-3。HP-5。R中対象の判定ゲイス-1。	

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
眼帯	
コネ:情報屋	
ナイフ	

合計装甲: 0    合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	ゲイス	消費
邪眼<イーグル・アイ>	PDロイス	N		
ボス	P 感服	N 恐怖		
ローザ・バスカヴィル	P 純愛	N 隔意		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 10    残り財産P: 5

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
コンセ:バロール	3	2						
効果:								
斥力の矢	2	2	MN	至近	ME	自動		
効果: 斥力を発生させる魔眼を作成。下記載。								
瞬速の刃	1	3	MJ	武器		白兵・射撃		
効果: 判定+(LV)個								
滅びの一矢	5	2	MJ	武器		射撃		
効果: 射撃攻撃ゲイス+(LV)個。HP-2。								
死の紅	1	2	MJ	武器		射撃		
効果: 与ダメージ時、シーン中対象の装甲値-(LV*3)。HP-3。								
	★							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

彼はアメリカの生まれだが、見た目は日本人そのものだ。  
 おそらく日系アメリカ人の両親の元に生まれたのだろう。何故曖昧な表現なのか、それは彼自身が親の顔を知らないからだ。  
 彼は物心ついた時には、既にスラムで生活をしていて、スラムでの生活は厳しく、常に死と隣り合わせの世界だった。  
 しかし、彼にはその環境の中で生き抜く力を持っていた。  
 過酷な環境を生き抜く為の、活力。他者にはない、深い生への渴望が。  
 その望みに呼応するかのよう、彼はオーヴァードへと目覚めたのだ。  
 彼はその力を以て、強きを挫き弱きを喰らって生きてきた。黒く耀く彼の瞳を見て、息があった者はいない。

彼の左眼は力を使う時に黒く染まる。しかし、それも初めだけだった。  
 彼の居場所は敵を仕留めても、また次の敵が現れる。その度に彼の瞳は色を変えた。  
 いつしか左目は白と黒のコントラストは無くなり、彼の生きる世界を写すように漆黒に染まってしまった。

そんな彼の前に一人の男が現れた。その男は彼に自分の元に来るよう、手を差し伸べてきた。  
 今まで周りは敵しか居なかった彼は、当然その男を攻撃した。  
 しかし男はその攻撃をいとも簡単に凌ぎ、それ以上の力で彼をねじ伏せた。  
 そして男はまた、邂逅した時と同じ言葉を吐いた。  
 「小僧、俺の元に来い。」

男は彼を養子として招いた。男の職業は世界の裏側を歩むマフィアであり、彼の力を必要としていた。  
 彼は男の話を快諾し、マフィアの一人として育てられることになった。  
 その日から、男は彼の親であり、ボスになった。彼にとって、力は正義であり絶対のものであったからだ。